

# バーナード・ブロックの *Spoken Japanese* 付属レコードに関する研究

池田菜採子

## 一 はじめに

太平洋戦争が開始する一九四一年の頃、アメリカは外国語教育に関心を持ち始めた。それ以前のアメリカでは、フランス語、ドイツ語などの教育は多少行われていたのだが、語学習得の目的はあくまでも「文学や文化の鑑賞」<sup>①</sup>であって、話し言葉を習得するための外国語教育は行われていなかった。まして、中国語や日本語は「奇妙きつな記号の集合にすぎない」という程度の認識でしかなかった。しかし、戦争の遂行が、話し言葉習得の必要性を生み出したのである。

当時のアメリカは、構造言語学が興り、それが発展していく最中である。アメリカの外国語教育への関心に呼応して、構造言語学者

たちが外国語教育に協力する事業を始めた。このとき、日本語の教科書 *Spoken Japanese* (1945、以下S Jと略す) を作成したが、言語学者バーナード・ブロック (Bernard Bloch, 1907-1965) である。S J は対日戦略の一つとして生み出されたのである。同様に、*Spoken Chinese*、*Spoken Dutch* など多数の外国語教科書が作成された。こうして完成した外国語教科書シリーズのことを、本稿では *Spoken Language Series* と呼ぶが、これらはアメリカの軍人教育のために使われた。このシリーズの教科書がどれも同じような構成や表記、文の導入順序、規格であったということは池田 (二〇一四) が考察した。

ブロックは、戦時中のアメリカで、日系人のインフォーマントを相手に日本語研究を行い、数々の優れた日本語論及びS Jを發表した。そうした諸論文の一部が、後の言語学である生成文法の中で、

また国語学の立場からは活用論という観点で取り上げられることはあつた。しかし、日本語教育という観点からはこれまで議論されることはなかつた。したがつて、日本語教育関係者の中で、ブロックのS Jという日本語教科書の存在を知る者はほんの一部に過ぎない。本稿の目的は、池田(二〇一四)に続きS Jの分析を行い、当時のアメリカにおける日本語の話言葉とその教育の一端を明らかにすることである。

S Jは、一九四五年にArmed Edition版<sup>③</sup>、同一九四五年にはHol社からPublic Edition版が出版された。一九七二年には復刻版が出版された。Armed Edition版、Public Edition版にはレコードが付いていたが、もはや国内でその所在を確認することはできない。S Jの復刻版にはカセットテープが付いていたが、二〇一五年十月現在、そのテープが全巻揃っているのは、OZ<sup>④</sup>及びNDLサーチで調べた限り、国内では国際日本文化研究センター(以下、日文研と略す)だけである。

今回、筆者は日文研の特別共同利用研究員として、そのカセットテープの研究を行った。その結果、カセットテープに収録されている音声は、Armed Edition版、Public Edition版のレコードに収録されたものと全く同一音声である可能性が高いことが確認された。つまり日文研所蔵のカセットテープは、一九四五年当時に収録された音声を聞くことができる、極めて貴重なテープなのである。

このカセットテープの研究を通じて、次のことを考察したい。まず、なぜS Jのレコードは作られたのかということである。太平洋戦争の頃、レコードを使った外国語学習は、日本でもアメリカでもまだあまり普及していない。本稿では、レコードに収録された内容と教科書本文を照らし合わせながら、レコードが作られた目的と具体的な使用方法を考察したい。

次に、収録されている日本語が、日本語として適切であるのかどうかということである。ブロックが日系人のインフォーマントを相手に日本語研究を行ったことは既に述べたが、戦時下のアメリカで暮らす日系人がどのような日本語を話していたのか、これまで知る術のないことであつた。日文研所蔵のテープは、ブロックが研究した日本語を完全に、そして忠実に再現してくれるのである。インフォーマントの話す日本語は、発音やアクセント、イントネーションという観点から見てもふさわしいものだったのだろうか。インフォーマントの日本語が不正確であつたために、ブロックの分析に何らかの影響を与えてしまったということはなかつたのだろうか。こうした点について、日本語教育という立場から検討したい。

最後に、S Jのレコードと同時代に日本国内で作成された日本語教育レコードとの比較を行う。その過程で、S Jのレコードが外国人を対象とした日本語教育という観点から見て、いかに先駆的なレコードであつたのかを検証したい。

## 二 *Spoken Japanese* のカセットテープの概要

日文研に所蔵されているカセットテープは六本である。S J は Unit 1: Getting Around、Unit 2: Meeting People と同じように課で構成されている教科書である。テープには Unit 1 から Unit 5、Unit 7 から Unit 11 までの Basic Sentences と Listening In<sup>(4)</sup>、及び Unit 1 から Unit 5 の Pronunciation Practice、Unit 6、Unit 12 の True-False Test が収録されている。録音時間は計二四〇分である。S J 本文には Unit 13 から Unit 30 も存在するが、レコードはもともと Unit 12 までしか作成されなかったため、Unit 13 以降の音声はない。

日文研所蔵のカセットテープが、一九七二年の復刻版に付いているカセットテープであることは第一節でも述べた。しかしこれは一九四五年に初めて出版された Armed Edition 版の S J に付いているレコードと同一音声であり、一九七二年時点で改めて別人が吹き込み直したものではないことは明らかである。その傍証として次の二点を挙げる。

(一) Armed Edition 版の S J には、“Record 2A, beginning,” “Record 2B, after spiral” のように、音声が吹き込まれている箇所が書かれている。カセットテープでは、例えば Record 2A から Record 2B に移る場面でガチャッと切れる音が入っており、これらの切れ目は全て

レコードの切れ目と一致している。

(二) 復刻版の S J には、所々に “On the phonograph record, the English of sentences 280 and 281 is read all together. The Japanese sentences are read separately.” (Bloch & Jordan 1972: 262) (拙訳: レコードでは、280 と 281 の英語の文は一緒に読まれているが、日本語の文は分けて読まれている) とか “The speaker on the phonograph record started to say *shira ga harenai su kai* and then corrected himself.” (Bloch & Jordan 1972: 142) (拙訳: レコードの話者は「空が晴れますか」と言ってしまう、その後、言い直している) といった注釈が入っている。もし一九七二年時点で誰かが吹き直したのであれば、その際に正しく吹き込めばよかったのであって、わざわざこのように書く必要はない。そもそも復刻版に付いているのは phonograph record ではなく、カセットテープである。

以上のことから、本稿で考察するのは、一九四五年に作成された Armed Edition 版のレコードに収録されていた音声であると考えられる。日文研に所蔵されているカセットテープは、日本語教育史を考える上で、また当時の日本語の音声を知る上でも非常に貴重な音声データである。

さて、S J のレコードはどのようなものだったのだろうか。佐野 (一九七三: 九八) は「語学のレコード・テープ ポルトガル語編」の中で「Spoken Portuguese: Basic Course, A Self-Teaching Course T1 + S

Pレコード二十四枚」と紹介している。Spoken Language Series (S J) も同じような構成・規格であったことから考えて、おそらくS J も同じ規格であり、SPレコード二十四枚が付属していたのだろう。また、S JのPublic Edition 版付属の*A Manual and Key*という手引書に“twelve-inch Vinylite records”という記述が見られることから、レコードのサイズは12インチ(三十センチメートル)であった。12インチのSPレコードは片面約五分収録できたということなので、二十四枚で二四〇分、日文研のカセットテープと収録時間も一致する。

ところで、このS Jのレコードが一体何枚ぐらい作成されたのか、どの程度利用されていたのか詳細は不明である。この当時、アメリカでレコードを使った外国語学習が普及していたのかといえば、決してそうではない。例えば、ミシガン大学に開校された陸軍日本語学校に参加していたハーバード・パッシンは、著書『米陸軍日本語学校』で当時の日本語授業風景を描写している。その中で、レコードを聞いて日本語を勉強したという記述は見られない。記述がないからといって、必ずしも使わなかったということではないものの、少なくともレコードを用いた学習法が、当時の日本語学習の主流ではなかったということは言ってもいいであろう。

終戦後、占領下の日本でアメリカの軍人が日本語を学習する際、S Jの教科書が使われていたことは確かである。森の記述を引用す

る。

終戦の翌年の七月、日本へ引き揚げてきたのだが、長沼氏は、私をA. E. P. School (Army Education School 当時「陸軍大学」と称されていた)の日本語教官に推薦してくれた。ここでは、年配の大佐、中佐より、若い一等兵、二等兵のほうが、当然ながら、できが良かったのを覚えている。BlochとJordanのこしらえたというE・M・マニュアル(Education Manual)を使って教えるのが当然であったが、長沼氏はこれで満足せず、自分の手を加えたものを謄写版刷りにして使った。この学校は夜学であった(森 一九九一:八三)。

森のいうE・M・マニュアル(Education Manual)というのは、S JのArmed Edition 版のことである。森の記述からS Jが使用されていたことは確認できるが、その際レコードも使われていたかどうかは定かではない。

また、山下も次のように書いている。

戦後に開校したT. E. A. M.<sup>(9)</sup>(福音同盟教団)の軽井沢日本語学校では、ブロック(B. Bloch)・ジョーデン(E. H. Jordan)の『Spoken Japanese, Basic Course』を使っていたが、宣教師たちは授業に備

えて、その会話を暗記するため、ひねもす林の中や矢ヶ崎川沿いの小道を往きつ戻りつしていたものである（山下一九九五・一一四―一一五）。

戦後でもないこの当時、日本人にとつてもまた、外国語教育レコードはまだ非常に珍しいものであったようである。 *Spoken Spanish* のレコードについて、東京外国語大学教授でスペイン語を教えた荒井は、次のように、やや感慨深く回顧している。

いま私は一枚の古レコードを思い出した。すると気になり出し、たしかに仕舞いこんである戸棚の奥から持ち出し、あらためてレベルを見た。12インチのSPである。U. S. Armed Forces Institute—SPOKEN SPANISH—Basic Course—Prepared by Special Division, A. S. F., War Department, for the War and Navy Departments とある。このレコードをどこで手に入れたのか、それは忘れてしまったが、これを見ると、終戦後のそのころ、私たちの先生のスペイン人が、東京の米軍の学校へ教えに行つておられたことを思い出したり、アメリカという国は軍がこういうレコードをこしらえ、しかも陸軍と海軍が仲よくひとつのレベルの上を名を連ねていることに感心させられたりする。ともかくあらためて聞いてみた。音も決して悪くない。

テキストは War Department Education Manual-Spoken Spanish のカーキ色のような色の表紙の、いわゆる進駐軍の学校用のこの教科書は、ひところまで古本屋の棚でよく見かけたものだ。この Armed Forces Spoken Series は、その後 Holt の手に移り、さらに Linguistic Society of America の the intensive language program に加えられ、表紙の色もふつうの派手な色に変わった。

〔中略〕もちろんこのころテープレコーダーという便利なものは、われわれの家庭になかった。スペイン語の「音」の教材といえは、私にとつては初めてご紹介したSPの Spoken Spanish が、最初で唯一のものだったということになる（荒井一九七三・五七）。

一方、SJ復刻版のカセットテープだが、こちらほどの程度使われていたのか定かではない。水谷（一九七三・七二）は「語学のレコード・テープ 日本語編」の中で「その他テープでは、“Round the World Japanese” Conversaphone 社、六十分二巻、“Spoken Japanese” Holt 社、六十分六巻などが市販されている」と述べているので、大きな書店では手に入ったのであろうし、また、日本語教育関係者の一部には知られていたようである。ただし、一九七三年当時、SJは既に新しい教科書ではなく、ブロックの門下生であったエレノア・ハーツ・ジョーデン (Eleanor Harz Jordan, 1920-2009) の教科書が

既に広く使われている時期であるので、S Jが大々的に売っていたということは考えにくい。水谷の記述から引用する。

“Beginning Japanese” by E. H. Jordan (一九六二年) Yale University Press, New Haven, Connecticut, U.S.A. アメリカの大学等でもっとも多く使われている入門教材の一つで、第一部(四〇九ページ)、第二部(四一〇)の二分冊からなる。通巻三十五課。テープは第一部、第二部それぞれに六十分ものテープ三十巻がついており、値段も張る。(各二五四、六〇〇円)(水谷 一九七三: 七二)

ところで、S Jを含む Spoken Language Series には全てレコードが付いていたと考えられるが、レコードは次のような信念に基づいて作られたものであった。S Jの Introduction から引用する。

「拙訳」どんな言語においても、直接的な知識が得られる唯一の、そして最良の根源はネイティブスピーカーである。ネイティブスピーカーだけが、あなたの発音が正確であるかどうか、またあなたが日本語の会話の中で使った文が実際の日本語であるかどうかを教えてくれるのである。この教科書で使われている方法は、全てのグループ授業において、日本語のネイティブス

ピーカーの存在を必要とする。もしネイティブスピーカーがいなければ、かわりに教科書付属のレコードを使いなさい。もし近くにネイティブスピーカーがいたとしても、なお、レコードはほかのドリルをしたり復習をしたりするのに役立つことでしょう。レコードは質問には答えられないが、いつも同じ語や文を何度も繰り返し同じ方法で提供してくれるでしょう。(Bloch & Jordan 1945: iv)。

S Jの Public Edition 版付属の *A Manual and Key* にも次のような記述が見られる。

「拙訳」ユニークな特徴…ホルト話し言葉シリーズのレコードは、レコードを流している間、あなたにネイティブの語を繰り返したり、話したりする機会を与えてくれる。あなたは、話すためにレコードを止めたり、全部のレコードが終わるまで待つ必要は全くありません。レコードの冒頭から、すぐにあなたは話すことを始め、語や句の後に続いて二回ずつネイティブの先生の真似をすることができのです (*A Manual and Key* より引用)。<sup>(8)</sup>

学習者がネイティブの発音を聞いて真似をする。真似をするためにレコードを一回停止する必要がなく、真似をするだけの空白時間

【収録内容：1】

男性 A	Good morning.
男性 B	Ohayoo gozaimasu.
(くり返し)	Ohayoo gozaimasu.
男性 A	Good day or Hello.
男性 B	Koñniti wa.
(くり返し)	Koñniti wa.
男性 A	Good evening.
男性 B	Koñbañwa
(くり返し)	Koñbañwa
男性 A	how?
男性 B	ikága
(くり返し)	ikága
男性 A	How are you?
男性 B	Ikága desu ka?
(くり返し)	Ikága desu ka?
男性 A	health or good spirits
男性 B	génki
(くり返し)	génki
男性 A	I'm well.
男性 B	Génki desu.
(くり返し)	Génki desu.
男性 A	as usual, without change
男性 B	aikawarazu
(くり返し)	aikawarazu
男性 A	I'm well as usual.
男性 B	Aikawarazu génki desu.
(くり返し)	Aikawarazu génki desu.

注：【収録内容：1】は筆者が書き起こしたものである。線より左側の男性 A、男性 B、(くり返し)という言葉そのものは収録されていない。表記は SJ 本文に合わせた。ñ は「ん」を表す。ikága のような表記は、「いかが」の「か」にアクセント核があることを示している。

出典：Bloch & Jordan 1972 (カセットテープ、日文研所蔵)。

が収録されているという、この現在では全く当たり前の語学学習法が、ユニークな特徴であったというところがとても興味深い。だが、この時代の語学学習法としては、少なくともアメリカにおいては、斬新で、独創的な発想であったのである。

次に、収録された音声について述べていきたい。日文研にあるカセットテープの録音状態は決していい方ではない。レコードをそのままカセットに移しかえたものであるので、雑音も多く、エコーがかかっているように聞こえる箇所も多い。録音内容は、印刷教科書

の一部分を録音したという形式である。SJ のレコードを吹き込んでいる人物は、英語を読む人が一人(以下、この人物を男性 A とする)、日本語を読む人が一人(以下、この人物を男性 B とする)の計二人で、Unit 1 から Unit 12 までの全ての音声で、この二人が吹き込んでいる。Basic Sentences は、まず英語部分を男性 A が読み、それに対応する日本語を男性 B が二回繰り返し読むという順に進められる。一度日本語を発音した後、繰り返し読むのに十分なポーズをおいて、二度目の日本語が発音される。例えば Unit 1, Section A の Basic Sentences は次のように録音されている(収録内容：1)。

これらの収録部分は、次のように使われることを意図して録音された。ガイドというのはネイティブスピーカーのことであるが、レコードはガイドと同じ役割を担うことを目的として作られた。つまりレコードの役割は、ネイティブスピーカーの代行であった。

【収録内容：2】

Listening In

1. Mr. Tanaka meets Mr. Doe on the street.

Tanaka :	Koñniti wa.
Doe :	Koñniti wa. Ikága desu ka?
Tanaka :	Aríгатоo gozaimasu. Aikawarazu géñki desu. Tabako ga hosii desu ka?
Doe :	Hái. Aríгатоo gozaimasu. Mátti ga arimásu ka?
Tanaka :	Hái dóozo.
Doe :	Aríгатоo gozaimasu. Onaka ga sukimásita. Ryooriya wa dóko ni arimásu ka?
Tanaka :	Massúgu saki ni arimasu. Wakarimásita ka?
Doe :	Iie. Wakarimasén desita. Moo itido itte kudasái.

注：【収録内容：2】は筆者が書き起こしたものである。Tanaka, Doeといった人名も収録されている。表記はSJ本文に合わせた。ñは「ん」を表す。Aríгатоoでは「ありがとう」の「り」にアクセント核があることを示す。

出典：Bloch & Jordan 1972（カセットテープ、日文研所蔵）。

なさい。もしあなたがレコードを使っているのなら、レコードは1、2、4のステップを与えてくれます。それぞれの日本語の語や文の後はポーズがありませんから、グループで繰り返し発音することができます。でしょう (Bloch & Jordan 1972c: 1)。

続いて、各ユニットのSection Cに配置されているListening Inがどのように収録されているか見ていきたい。Listening Inは、会話文の聞き取りを目的としている。課を追うことに長くなり、Unit IIでは三十九行の長さからなる会話文を聞き取らせる。

Listening Inでは、英語は読まれず、同じ人物（男性B）が日本語を単独で読むという形式がとられている。日本語は一度しか読まれない。例えばUnit 1, Section CのListening Inは次のように録音されている（収録内容：2）。

ここでも、さきのBasic Sentencesと同様、レコードの役割はネイティブスピーカーの代行である。SJ本文を読めば、レコードをどう使って学習すればいいか明確に書かれている。

〔拙訳〕ガイドまたはレコードの話者は、あなたが後について繰り返し読むのに十分なポーズをあけて、読み上げます。大き

〔拙訳〕もしあなたにガイドが<sup>9</sup>いるなら、ベーシックセンテンスを勉強する際、あなたがすべきことは次の通りである。

- 1 リーダー<sup>10</sup>がはじめの英語の語や句を読む。
  - 2 ガイドが日本語を発音する。
  - 3 グループでガイドが言ったことを繰り返し発音する。
  - 4 ガイドが日本語をもう一度言う。
  - 5 グループでまたそれを繰り返す。
- リーダーが英訳をはじめに与え、ガイドが二回日本語を言つて、グループがそれぞれガイドの後に繰り返して言うという方法でベーシックセンテンスのリストの全部を学習してから次に進み



くそしてはつきりと発音し、できるだけガイドの発音に忠実に繰り返し真似しなさい。

一度目は本を閉じて、あなた自身の耳でどれぐらい理解できているか確認しなさい。二度目は本を開いて、聞くとともに、印刷された字を目で追いなさい (Bloch & Jordan 1945c: 22)。<sup>(21)</sup>

次に、Pronunciation Practice がどのように収録されているか見ていきたい。Pronunciation Practice は Unit 1 から Unit 5 にかけて配置されているが、レコードではまとめて録音されている。収録内容は次頁の通りである。

Pronunciation Practice の収録部分は、学習者に次のように使われることを意図して録音された。ここでもまた、*Basic Sentences* や *Listening In* と同様、レコードに求められたのはネイティブスピーカーの代行である。

「拙訳」リーダーは、グループの中から一人選んで、次の部分の解説を読ませます。ガイドまたはレコードの吹込者は、練習にある日本語の語を与えます。それぞれの語をガイドから聞いた後、繰り返し斉唱します。そのユニットで説明された音に特に気を付けながら、できるだけガイドの発音を真似しなさい。正しい発音を習得するために必要に応じて何度も練習しなさい。

もしあなたにガイドがいるなら、ガイドはあなたの模倣がガイドを満足させたかどうか言ってくれるでしょう。もし満足できないなら、ガイドはあなたが正しくその音を習得するまで何度も何度もその語を言い続けてくれます。もしあなたがレコードを使っているのなら、グループ全体で、一人一人の発音を評価し、こだまのように聞こえるまで何度も何度も練習を続けなければなりません。

レコードでは、吹込者は日本語を一度ずつしか発音しませんが、繰り返し発音するのに十分なポーズがとられています。英語訳は教科書には印刷されていますが、レコードには収録されていません (Bloch & Jordan 1945c: 14)。<sup>(22)</sup>

ところで Pronunciation Practice では、S J 本文とレコードの収録内容が異なるところが何カ所もある。例えば、Practice 13 の *benri* という語は、レコードには収録されているが、S J 本文には書かれていない。反対に、S J 本文では Practice 16 の *tugi* の前に *ukurimásu* があるが、レコードには収録されていない。Practice 17 も *kyūzui* の前に *shonzu* があるが、これもレコードには収録されていない。こうしたことから、レコード吹込者は何を見ながら収録を行ったのだろうという疑問が生じる。Anned Edition 版が完成する前の草稿のようなものがあつたのだろうか。そうだとすると、完成段階で、

Practice 16. 〔子音 [ts]〕 tugí tuyói tutumi	Practice 17. 〔子音 [dʒ] と [z]〕 zidóosya zimúin kyúuzi	Practice 18. 〔拗音 [rj]〕 ryooriya ryóosiñ ryokoo
Practice 19. 〔拗音 [c]〕 syokkoo syúziñ teisyaaba	Practice 20. 〔拗音 [ts]〕 otya tyóotto tyoodo	Practice 21. 〔拗音 [dʒ] と [z]〕 Sóo zya arimaséñ zyotyuu zyúñsa
Practice 22. 〔促音〕 yukkúri ippai <sup>注3</sup> massúgu tyóotto	Practice 23. 〔促音〕 zassi issyoni mátti ittyaku yottú	Practice 24. 〔撥音〕 añmari koñniti wa gomeñnasái
Practice 25. 〔母音の無声化〕 kisyá kippu hito kusuri watakusi sukí desu	Practice 26. 〔母音の脱落〕 heitai desita arimásita tikái tukurimásu tukue hutarí	Practice 27. 〔句末の母音の脱落〕 Sóo desu arimásu kimásu
Practice 28. 〔平板式アクセント〕 soko kodomo aida tañsu añmari siñbuñ aikawarazu	Practice 29. 〔1、2 拍目にアクセント核〕 mádo hoñ háyaku máiniti damé desu anáta Nihóñ tatémono	Practice 30. 〔3 拍目以降にアクセント核〕 koobá desu sayonára arimásita eigákañ atatakái arimaséñ yasumimásita arukimasyóo wakarimaséñ

注1：【収録内容：3】は筆者が書き起こしたものである。表記はSJ本文に合わせた。また、〔 〕内は収録内容ではなく、何の発音練習であるか筆者が記したものである。

注2：SJ Armed Edition 版には、ガイドのために書かれたマニュアルである *Guide's Manual* というものがある。この中には「分りましたか」と書いてあるが、レコードでは wakarimásu ka と読まれている。

注3：英語訳が one cupful となっているので、正しくは íppai (1 拍目のみ高ピッチ) だと思われる。しかし、レコードの発音が íppai (1 拍目のみ低ピッチ) になっていて、ブロックもそのように表記したようである。

出典：Bloch & Jorden 1972 (カセットテープ、日文研所蔵)。

【収録内容：3<sup>注1</sup>】

Pronunciation Practice		
Practice 1. 〔母音 /a/〕 ikága sayonára wakarimásu ka <sup>注2</sup> tabako	Practice 2. 〔母音 /e/〕 géñki hóteru beñzyó kore	Practice 3. 〔母音 /i/〕 itido hakkíri migi hidari
Practice 4. 〔母音 /o/〕 mótto yóku dóko nódo	Practice 5. 〔母音 /u/〕 yukkúri kudasái massúgu mizu	Practice 6. 〔二重母音〕 háí máe kau kao ié ue teisyaba
Practice 7. 〔長母音〕 apáato obáasan ée teeburu hosí desu bíru dóozo koohí gyuunyuu zyúu	Practice 8. 〔語末の /ñ/〕 páñ goháñ wakarimaséñ Nihóñ Nihoñzín	Practice 9. 〔語中 /ñ/ の [m] [n] [ŋ]〕 sáñpuñ Koñbañ wa gúñtai Náñ desu ka? señsoo beñzyó géñki Páñ ga arimasu
Practice 10. 〔語頭の [g] と語中の [ŋ]〕 géñki góhañ ikága migi	Practice 11. 〔子音 [h]〕 hidari koohí hi hirú	Practice 12. 〔子音 [f]〕 húne huyú hurúí gohuñ
Practice 13. 〔子音 [r]〕 sayonára yukkúri wakarimásu kore hóteru raíneñ rokú bénri	Practice 14. 〔子音 [c]〕 sigoto watakusi hosí desu dóo itasímásite	Practice 15. 〔子音 [tɕ]〕 itido utí máiniti tomodati

benri を Practice 13 から外し、Practice 16 に tukurimásu を、Practice 17 に Nihonzin を加えた目的は何だったのであろうか。ちなみに Pronunciation Practice 以外で、レコード収録後に本文を書き換えた形跡が見られる箇所は見当たらない。吹込者が読み間違えた場合は逐一注釈という形で説明している。

この Pronunciation Practice は、単音の練習をさせるにあたり、その単音が現れる環境をよく考慮して作られている。例えば、Practice 14 は子音 [c] の練習であるが、sigoro のように語頭に現れる場合、watakusi のように語中でかつ無声化母音とともに生じる場合、hoshi desu のように語中でアクセント核を伴う母音とともに現れる場合、doo irasimásite のように irasi の [c] と másite の [c] の二回が現れ、かつ másite の [c] が無声化する場合の四例を挙げている。Pronunciation Practice で取り上げた単語には、練習する単音が撥音や促音の後に生じないような工夫も見られる。

Practice 13 は子音 [c] の練習で、英語話者にとって発音しにくい音であり、他の Practice に比べて練習量も多い。その中でも [c] に先行する [c] が yukúri、wakaimásu、benri と三つある。benri の [c] は「ん」の後であるから弾きがなく、聞き取りにくい。発音練習させる語として無難ではない。そのために練習から除外したと考えるのはどうだろうか。

Practice 16 は、tugí、tuyói、tutumí の三つがレコードには収録され

ているが、tukurimásu が本文にはあるのに、レコードにはない。実は Practice 16 を学習する時点で、この三つの語は学習者にとって未習語である。Pronunciation Practice で使われている語は、そのほとんどが既習語であり、学習者にとつても意味や用法のわかる語を練習した方がよい。そこで、tukurimásu が付け加えられたのではないだろうか。tukurimásu は Practice 16 が配置されている Unit 3 の新出語句である。

Practice 17 は zidóosya、zimún の [d] が語頭、kyúuzi の [z] が語中である。第三節で述べるように、ブロックはこの二つの子音を自由異音と見なしている。Nihonzin は語中で [d] が出現するよい例である。レコードが吹き込まれた時期と、教科書が完成した時期を比べると、レコードが吹き込まれた時期の方が先である。なぜなら、先に述べたとおり、レコードで言い間違えた箇所について、教科書本文の注釈で指摘がなされているからである。したがって、収録音声と本文との差異があるとするならば、収録後に本文に訂正が加えられたと考えるのが妥当である。しかし、実際にはどのような理由があつて本文を修正したのか、その真意はもはや知る術がない。ただ、日本語教師が日本語の発音練習をさせる場合、どの語でもいいわけではなく、アクセントや特殊拍の有無、無声化の有無、語頭か語中かなど単音の現れる場所を考慮して語を選ぶことは、現在ではごく当然のことである。Pronunciation Practice のレコードと本文の違い

から、ブロックがいかに学習者に配慮した良い練習問題を作成することにこだわったか、その気遣いが伝わってくるような気がする。

ここまで、ごく簡単にはあるが、レコードに収録された音声の一部を紹介し、その収録部分がどう学習者に利用されることを目的として作成されたのか、本文とレコードの対応関係を観察してきた。その結果、レコードの役割はネイティブスピーカーの代行であり、レコードの使用方法は、具体的かつ明確にS J本文中に示されていることが確認できた。また、日本語の文や句の後に十分なポーズが確保され、学習者がネイティブスピーカーの発音を繰り返し真似するための配慮がなされた。それゆえに学習者は、レコードを止めたり、前に戻したりという煩雑な作業をすることなく、語学学習に専念できたのである。

吹き込まれた音声の特徴については次節で、インフォーマントについては第四節でさらに考察していきたい。

### 三 日本語吹込者の音声的特徴

S Jのレコードに収録された音声について、その特徴を詳しく考察していきたい。日本語を吹き込んでいる人物は、ブロックのインフォーマントの一人で、おそらく日系人である。またその人物は、音声を聞く限り、特にアナウンスの訓練を受けたことのない素人の

ようである。しかし、日系人とはいえ、彼の読む日本語はアクセントが正確であるほか、ガ行鼻濁音や無声化の発音も大変きれいなものである。ただ、次の発音は、日本語教育レコードとしては、やや気になるところである。

(1) 吹込者の日本語を読むスピードがやや遅く感じられる。読むスピードが遅いことの例を挙げると、「もう一度言ってください」という文は、S Jでは約一・三秒で読まれているが、ジョーデンの *Beginning Japanese* のカセットでは、同じ文が約〇・九秒で読まれている。また、「あの人はだれですか」という文は、S Jでは約一・四秒で読まれているが、*A Course in Modern Japanese* のCDでは同じ文が約一秒で読まれている。もちろん、これだけで読むのが遅いと言いつことはできない。しかしS Jの吹込者は、一文字ずつはっきり読み過ぎていくように聞こえ、そのことが遅さに繋がっているのかもしれない。

(2) 「まどから そとを 見てください」というような場合、「ま」「そ」「み」が強く、やや不自然な抑揚が感じられる。

(3) 「はいります」「あります」といった、*-masu form* の発音で、「ま」が強く「す」が弱い。そのため「はいりまーす」「ありまーす」のように聞こえる箇所が多い。

(4) 「あなたは米国人ですか」「あなたはどんな仕事をしていますか」などの疑問文でもイントネーションの上がらない発音がされ

ている。これは吹込者の個人的な習性であるのか、あるいは何か意図するところがあつたのかよくわからない。ただ、Basic Sentences だけならともかく、Listening In は普通の会話文である。会話文で全くイントネーションが上がらないうと、やはり日本語としてはかなり不自然に聞こえる。

不思議なことにS Jには、イントネーションに関する言及が全くない。例えば、‘Particle ka in questions’ (Bloch & Jordan 1945c: 9)、拙訳：疑問文の助詞「か」の項目では、次のように書かれているが、イントネーションについては触れられていない。

〔拙訳〕日本語の普通の疑問文は、全て「か」で終わる。どんな発話でも「か」を付け加えるだけで、他に何も変えることなく、疑問文にすることができる (Bloch & Jordan 1945c: 9)。<sup>(15)</sup>

後にジョーデンは、同じ‘Question Particle ka’ (Jordan 1963: 9) 拙訳：疑問の助詞「か」の項目で、次のような説明を与えている。

〔拙訳〕「か」で終わる疑問文は、上昇調イントネーションか、平板調イントネーション<sup>(17)</sup>で発音される。助詞「か」で終わるすべての文は疑問文である。だがすべての疑問文が「か」で終わるわけではない。例えば「あなたは」という句は、疑問文のイ

ントネーションで発音されれば疑問文になるのである (Jordan 1963: 9-10)。<sup>(18)</sup>

しかし、Bloch (1946) では、日本語のイントネーションを次のように説明している。

〔訳〕<sup>(19)</sup>日本語の発話は、以下の四種のイントネーションのいずれかで終わる。

(1) 下降調 (Falling) — 最終音節のピッチが直前の音節より低い。意味：終結(「文の終り」あるいはそれに類すること)。記号：/ / 例：Soo desu ka. (「そうですか」) Is that so? (「驚きの表現」)。

(2) 上昇調 (Rising) — 最終音節のピッチが直前の音節よりかなり高い。意味：活気あるいは特別な関心。記号：/ / 例：Soo desu ka. (「そうですか」) Is that [really] so? (「関心や驚きの表現」)。

(3) 高下降調 (High-falling) — (最終有アクセント音節の、あるいは、どの音節もアクセントをもたない場合は発話の第一音節の) いちばん高いピッチと(最終音節の) いちばん低いピッチとの差が大きい。意味：生き生きとした感情。記号：/ / 例：Soo desu ka. (「そうですか」) Oh so that's it!

(4) 平板調 (Level) — 最終音節が、無アクセント音節の後で

は少し高めに、有アクセント音節の後ではより低くかつやや上昇調。意味・保留（「不完結」あるいはそれに類すること）。記号：/.. / 例：Soo desu ga. (そうですが) [That may be so, but <sup>(B)</sup>still...] (Bloch 1946: 154-155) ただし訳はロイ・A・ミラー 一九六九：二六～二七)

Bloch (1946) で明らかにしたイントネーションの説明を、なぜS Jでは学習者に提示しなかったのだろうか。レコードの、特に [rising In] のような会話文の収録で、疑問文のイントネーションを上昇調にしなかったのは、何か意図するところがあったのだろうか。このあたりについては今後の課題としたい。

(5) 複文は前半と後半に分けて発音される。日本語教育レコードとしては、分けて長い文を練習させた方が良かったように思える。

(6) [i] の発音は、全般に弾力が弱く、[i] のように聞こえる。例えば「ホテル」「これ」「もらいました」といった語が文中で読まれる場合である。そのため「ありました」が「あいました」と聞こえる場合がある。

(7) 語中の [k] が [g] のように濁る。例えば「ください」「どこに」「さかな」「たばこが」「たなかさん」「食べてから」のような語で、それぞれ「ぐださい」「どこに」「さがな」「たばこが」「たながさ

ん」「食べてから」のように聞こえる。

(8) 「兵隊」「停車場」「水平」「たいてい」「映画館」「米国」といった語で、[ee] ではなく [ei] と発音されている。ただし、早く読む場合は、[ee] と発音していることもある。そのためブロックも [heitaɪ] [reisyaba] と書いている。それゆえに、第二節で考察した Pronunciation Practice では、[reisyaba] は二重母音の Practice 6 に、[reburu] は長母音の Practice 7 に配置されている。実際、レコードの発音は [reisyaba] は [ei]、[reburu] は [ee] となっている。

後に、ジョーデンは [eego] [beekokuzin] [reburu] (Jordan 1963: 391-392, 404) のように表記した。ブロックとジョーデンの表記の違いを疑問に感じていたが、ブロックがインフォーマントの発音に忠実に表記した結果であることが確認できた。

現代でも [ei] と [ee] の発音は規範に揺れがあることは、次の『NHK 日本語発音アクセント辞典』の記述にある通りだが、ブロックのインフォーマントは [ei] と発音する傾向にある人物であったことがうかがえる。

共通語では、漢字音「英」エイ [ei] などをエー [ee] のように長母音に発音する。例えば次の例のとおり。エーゴ (英語) ケーサツ (警察) センサー (先生) テージ (定時) ヘーワ (平和) メーモク (名目) レーカイ (例会) ただし、特にていねいに発音す

るときはエイゴ・ケイサツ・センセイ・のようにエイになる。

この長母音は、「中略」東京方言以外の地方にも広く行われる。これに対して日常生活で、エイ [ei] が優勢な地方は、九州をはじめ四国・紀伊半島などの南部や伊豆利島や八丈島三根などである。しかし、今日では、これらの地方も、しだいにエイ [ei] は退化してエー [e:] に変わりつつある (NHK放送文化研究所編 一九九八・付録一三八)。

(9) ザ行子音は、母音に挟まれたときは摩擦音、それ以外の環境では破擦音として現れるという立場から説明すると、「みじかくて」の「じ」は母音に挟まれているので摩擦音として発音するところを、吹込者は破擦音に近い発音を行っている。同様に、「ごじつせん」の「じ」も破擦音に近い。そのためブロックもS Jの中で次のように述べている。

〔拙訳〕日本人の中には、この子音〔筆者注・ㄐ〕を *pa:tsʰ* の *pa:*、または *pa:tsʰ* の *pa:* のように発音する人がいる。ガイドに従って、ガイドが発音した音を言いなさい。しかし、もしガイドがㄐを *pa:* のように発音したとしても、日本語において *pa:* と *pa:* は交換可能であることを覚えていなさい。そして母音 a, e, u, o の前のどこで子音 ㄐが生じてても、どちらの発音でも正しい

ということをお忘れはいけません (Bloch & Jordan 1945c: 66)。<sup>(21)</sup>

(10) アクセントは正確である。例えば副詞の「昨日」を LHH、名詞の「昨日」を LHL と発音し、またブロックもそう書いている。しかし「うち」という語は吹込者の発音とブロックの記述が異なるのでおもしろい。ブロックは *utē* *utini* *utwa* *utide* *utikara* といずれも *u:* にアクセントを付け、尾高型と認識している。ただし、「うちの犬」は *u:ni no inu* と書いており、「の」が後続する場合はアクセントを付けていない。一方、吹込者は「うちへ (LHH)」「うちに (LHH)」「うちは (LHH)」「うちで (LHH)」「うちから (LHH)」と、いずれも平板式アクセントで発音し、「わたくしの」が前に来る場合のみ、「わたくしの」うちへ (LHL)」「わたくしの」うちは (LHL) と尾高型アクセントで発音している。このことは、『NHK日本語発音アクセント辞典』で、「うち (LH)」を平板式アクセントとし、但し書きとして「*う*のうち」は尾高も」と書かれているため、吹込者の発音と一致する。

#### 四 インフォーマント

レコードの日本語を収録した人物が、ブロックのインフォーマントであり日系人であろうということは既に第三節で述べた。イン



フォーマントという言葉を、ブルームフィールド (Leonard Bloomfield, 1887-1949) は次のように定義している。Bloomfield (1942) が戦時中のアメリカで行われた一連の外国語教育事業の理論的基礎であることは、池田 (二〇一四) で論じた。

〔拙訳〕その言語の話者が話すのをよく聞いて、真似をするこ  
とで初めて我々はその言語を話し、理解することができるよう  
になるのである。そういう話者のことをインフォーマントと呼  
ぶ (Bloomfield 1942: 2)。<sup>(28)</sup>

ブルームフィールドは、インフォーマントとの接し方について、  
次のように述べている。

〔拙訳〕インフォーマントは先生ではないし、先生のように扱っ  
てはいけない。原則として彼らは自分の母語の音や活用、構造  
について勉強したことはないはずである。彼らは自分の母語に  
ついて理論的説明を正しく行うことはできないのである。彼ら  
がそういう説明をしようとしたら、それは全く時間の無駄であ  
ることがわかるだろう。言語学者であっても、慎重な検証の後  
でしか、当該言語の概括を述べることはできないのである。「ど  
のようにその音を産出するの」とか「その動詞形はいつ使うの」

とか、そういうたぐいの質問をインフォーマントにしようとす  
る人もいるだろう。そういう質問は、ただインフォーマントを  
困惑させ、混乱させるだけである。彼らはそれに答えられるだ  
けの訓練を受けていないので、なんとか説明を取り繕おうとし  
て、あなたの時間を無駄にするだけである (Bloomfield 1942: 2)。<sup>(29)</sup>

そしてブルームフィールドは、インフォーマントと言語学者との  
関係は、次のようにあるべきだと述べている。

〔拙訳〕教育を受けた、「教養ある」インフォーマントは決して  
好ましくなく、時に粗悪である。良いインフォーマントとは広  
範囲な語彙を駆使しながら自然に、自由に話せ、同時に言語学  
者が書き取れる速度で話すこともできる人である。悪いイン  
フォーマントは英語で理論的説明をしようとする人である。イン  
フォーマントを丁寧扱いなさい、ただし、インフォーマン  
トには言語を話し、書き取るために必要なスピーチをさせるだ  
けの業務にとどめておきなさい。インフォーマントが物語や思  
い出話、ユーモアを自分の言語で話せるように仕向けなさい  
(Bloomfield 1942: 4)。<sup>(30)</sup>

さて、ブロックはどのようなインフォーマントとともに、日本語

研究を行ったのであろうか。Armed Edition 版の S J には、著者の名前の下に “with the collaboration of Mikiso Hane, Toshio Kono, and others” と書かれている。このことから Mikiso Hane と Toshio Kono という人物が S J 作成に大きく寄与したインフォーマントであると考えられる。そのことはブロックの門下生であったロイ・A・ミラー（一九六九・xv）が、「ブロックが多くのインフォーマントを高く買っていたことは、自分の *Spoken Japanese* の第一巻の表紙に自分とエレノア・ハーズ・ジョーデンの名前と一緒に彼らの名前を載せたことでわかる。この功績表示の伝統は、イエールでのブロックの弟子であるジョーデン夫人の *Beginning Japanese* でも受け継がれている」と述べていることから明らかである。

このうち、Mikiso Hane（羽根幹三<sup>(25)</sup>、一九二二～二〇〇三）について、今回の調査から次のような経歴の持ち主であることがわかった。

〔拙訳〕羽根は一九二二年、カリフォルニアのホリスターで、日系移民の両親から生まれ、十歳の年までそこで暮らした。羽根の両親が、羽根を日本へ送り出し、羽根は広島で叔父とともに暮らし、学校に通った。

羽根は一九四〇年にアメリカに戻ったが、一九四一年、日本との戦争が勃発すると、一九四二年五月から一九四三年十月まで、アメリカ政府によってアリゾナキャンプに抑留された。十八カ

月に及ぶ抑留生活の後、羽根はイエール大学の米軍プログラムで日本語を教える職に申し込んだ。戦後、羽根は日本語を教えたり、アジア研究ジャーナルで文字打ちをするなど働きながら大学を卒業し、一九五二年に学士、一九五三年に修士、一九五七年に博士の学位を取得した。

……羽根はノックス大学で、一九六一年から退職する一九九二年まで、西洋文明の歴史はもちろん、日本・中国・インド・ロシアの歴史など幅広い歴史コースを教えた（Knox College Website<sup>(26)</sup>）。

戦後の羽根の業績として、*Modern Japan: A Historical Survey* がある。これはアメリカの大学生向けに、日本の歴史を易しく解説した書である。そのほか、*Eastern Phoenix: Japan since 1945*（拙訳：東の不死鳥——一九四五年からの日本）や、思想家丸山眞男の『日本政治思想史研究』を翻訳した *Studies in the Intellectual History of Tokugawa Japan*（拙訳：徳川日本の思想史に関する研究）が挙げられる<sup>(27)</sup>。だが、戦後に書かれた羽根の著書の中で、ブロックや戦時中の日本語教育に関する言及は見られない。

羽根は S J 作成の協力者として筆頭に名前が挙がっているほか、S J のガイドのために準備されたマニュアル *Guides' Manual for Spoken Japanese: War Department Education Manual EM563* の監修を行った人物でもある。そのようなことから、S J が出版された一九四五

年当時若干二十三歳だった羽根に、ブロックが日本語話者として、一定の信用を置いていたということは一応言つてもいいであろう。

##### 五 戦前・戦中の語学教育と音声教材——S Jの周辺——

ここからは、S Jとはほぼ同時代に日本国内で作られた主要な日本語教育レコードを紹介し、S Jと比較してみたいと思う。その前に、まず、いつ頃から語学教育にレコードが使われるようになったのだろうか。その時期について、野村は次のように述べ、世界最初の語学レコードを作った人物として、コーティナフオンを挙げている。

一八八二年、アメリカに世界最古の語学学校を創立したコルチナ伯は、音と脳細胞の結びつきは訓練によつて得られると考え、トマス・A・エディソンの協力を得て、世界最初の語学レコードを世に送った(野村 一九七三: 八二)。

日本語教育のためのレコードが作られるようになった時期について、倉田は次のように述べている。

『音楽と蓄音機』(二二年四月号)によると、横田昇一らは、

一二年九月二十八日に日本録音蓄音機協会を設立し、小学校国

定教科書の標準レコードを完成した。また『標準語』<sup>(26)</sup> という概念のない時代であるから、たとえば、「扇」の読み方は「オーギ」か「アウギ」か。「後」は「ウシロ」か「オシロ」か。「質屋」は「ヒチャ」か「シチャ」かなど、朗読上の問題提起がなされた。

国語学者上田万年や三上参次らはこのレコードを絶賛したので、標準語と方言の扱いがにわかにクローズアップされてくる(倉田 一九七九: 二七三)。

桜井は、右の倉田(一九七九: 二七三)を引用し、さらに『コロムビア五十年史』を引用した上で、次のように述べている。

『コロムビア五十年史』によれば、「昭和四年(一九二九年)九月、わが社は日本で最初の教育レコードを発売した」ということである。いずれが「日本で最初」であるかは本稿の主題ではないので、その議題には入らない。ただ、この時に国語(あるいは日本語)関係のレコードが発売されたことは、まちがいない事実である。それは神保格『33000 日本語のアクセントの言葉調子』(上下)である(桜井 一九九二: 四〇、原文通り)。

だが、倉田が挙げた小学校国定教科書の標準レコードも、桜井が

挙げた神保格のレコードも、どちらも外国人が日本語を習得するために作られた日本語教育レコードではない。そのことを確認するため、桜井の引用にあるレコード番号、コロムビア33000 神保格《発音とアクセント》のA面に収録されている〈日本語のアクセントと言葉調子(上)〉の内容を紹介する。ここで考察のために使用した音声は、日本語教育学会編集『戦前戦中の日本語教育教材レコード 復刻版』に録音されているものである。このレコードの収録時間は両面で約六分、講演の録音か、あるいは何かを朗読しているように聞こえる。

#### 【収録内容…4】<sup>31)</sup>

わたくしどもの言葉には、いろいろな音を使いますが、そのほかに声を高くしたり低くしたりして、調子をつけることもあり、強くしたり弱くしたりして抑揚をつけることもあり、また音を長くひいたり短くつめたりして、話の早さを変えることもあり、また、そのうち例えば、同じそうですかという言葉も、そうですか(ノ…筆者注…上がるイントネーション)と終わりの方であげたり、そうですか(ノ…筆者注…下がるイントネーション)と下げたりするのは声の高さの違い、調子の違いでございます。「わたくしはきのう帰りました」という言葉も「わたくしはきのう帰りました」(筆者注…「きのう」にプロミネンス)とか「わ

たくしはきのう帰りました」(筆者注…「わたくしは」にプロミネンス)とかいうのは、ところどころで声を強く言う違いでございませう。また、「わたくしはきのう帰りました」と言えば早口になり、「わたくしはきのう帰りました」(筆者注…一文字ずつゆっくり発音)といえはゆっくり言うことになります。早いというの音の短いこと、ゆっくりというの音を長くすることでございます。この調子や抑揚や早さは、話のいろいろな場合によつてさまざまに変わるものがございますが、ある言葉には、いつも同じような調子の決まっているものがあります。例えば、東京ではご飯を食べるときに箸を使う、川に橋がかかっているなどと言います。箸のときは「は」が高く「し」が低い、橋というときは「は」が低く「し」が高いでございます。……(コロムビア33000 神保格 A(日本語のアクセントと言葉調子(上)))

このように、神保格の〈日本語のアクセントと言葉調子(上)〉は、外国人が初級日本語を習得するために作成されたものとは到底考えられない内容である。おそらく日本人が東京<sup>32)</sup>のアクセントやイントネーションを勉強するために作られたレコードであろう。では、いつ頃から外国人を対象とした日本語教育のためのレコードが日本国内で作られるようになったのだろうか。

次に、コロムビア33350 国際日本語協会編《レコードによる日

本語の学習 JAPANESE LANGUAGE STUDY COURSE》(以下《レコードによる日本語の学習》と略す)を考察してみたい。ここで考察する音声も、日本語教育学会編集『戦前戦中の日本語教育教材レコード 復刻版』に収録されているものである。ただしレコードの作者または監修を行った人物、レコードが作られた目的や正確な発行年など、詳細はよくわからない。だが、レコード番号から昭和四年(一九二九年)〜昭和十七年(一九四二年)の間に発行されたことは確かである。

このレコードのA面(日本語の発音 (一) Pronunciation Exercise: i. The Japanese Vowels)とB面(日本語の発音 (二) Pronunciation Key Word ii. The Japanese Syllabary)を取り上げ、S Jの発音練習とどのようなに異なるか検討する。このレコードを朗読しているのは男性一名である。

【収録内容 : 5】<sup>(38)</sup>

いえあおう

いーえーあーあーえーいー

いーえーあーえーいーあー

おーうーうーおーあーあーおーうーおーあー

いーえーあーおーうー

うーおーあーえーいー

あいうえお

かきくけこ

さしすせそ

たちつてと

なにぬねの

はひふへほ

まみむめも

やいゆえよ

らりるれろ

わいうえを

ん

がぎぐげご

がぎぐげご (鼻濁音)

ざじずぜぞ

だちづでど

ばびぶべぼ

ぱびぷべぽ

め みみ はな くち あたま ゆび て うで いえ と

まど かぎ へや ざしき かべ れんが やね けむり い

す つくえ ほん えのぐ いろ せんす ぼうし

げた ぞうり き えだ は はな ね くき はる なつ  
あき ふゆ とり いぬ ねこ うし ぶた にわとり すず  
め やま かわ もり はし みち そら あさ

ひる よる ごぜん ごご ちち はは あに あね おとう  
と いもうと おじ おば

(コロムビア 33350 国際日本語協会編 A〈日本語の発音〉)

Pronunciation Exercise i: The Japanese Vowels) B〈日本語の発音

(ii) Pronunciation Key Words ii: The Japanese Syllabary) )

このレコードに教科書があつたかどうかはわからない。だが、第二節で記したS Jの発音練習に比べると、かなり量が少なく感じられる。実際には、S Jの Pronunciation Practice が七分半、《レコードによる日本語の学習》の発音練習が七分二十秒であるので、時間的な差は全くない。

「あいうえお」ではなく、「いえあおう」から練習が始まっているところがなかなか興味深い。これは、イギリスの音声学者ダニエル・ジョーンズ (Daniel Jones, 1881-1967) の基本母音の影響だろうか。ジョーンズはハロルド・パーマー (Harold Edward Palmer, 1877-1949) とかつて同僚であつたことが知られている。そのことは、例えば、高梨 (一九六三:一〇) が「日本に来るまでの Palmer の研究をふりかえってみよう。ロンドン大学に奉職して Jones 博士の下で教授法、

音声学、Spoken English の研究に従事した七年間 (三十八〜四十五才) がかれの学問の最盛期と考えられている」と述べていることから明らかである。

高梨 (一九六三:三二) は、パーマーが著書 *A Grammar of Spoken English* で示した英語音分類表をまとめ直している。左の表は、その一部を抜粋したものである。これを見るとパーマーが記した母音もやはり「いえあおう」の順に始まることがわかる。

番号	音声記号	該当音を含む例語	正書体
No.1	i:	si:	SEE
No.2	i	giv	GIVE
No.3	e	ten	TEN
No.4	æ	bæk	BACK
No.5	a:	ka:m	CALM
No.6	ɔ	stɒp	STOP
No.7	ɔ:	ɔ:l	ALL
No.8	u	buk	BOOK
No.9	u:	tu:	TOO

出典：高梨 1963 : 32。

《レコードによる日本語の学習》が作られた経緯はよくわからないが、「いえあおう」に始まる発音練習から、この当時の日本語教育にジョーンズ、パーマーの英語教育の影響を垣間見ることができるといえる。また、後に紹介する『ハナシコトバ』でも、上巻の冒頭で口の形と口腔断面図が提示されているが、これも「イエアオウ」の順に並んでいることは興味深いところではある。この点については本稿ではこれ以上言及しないが、今後研究してみたい課題である。

《レコードによる日本語の学習》の発音練習は、「いえあおう」から始まることを除いては、工夫が感じられる箇所は少ない。S Jがそれぞれの母音、子音、また特殊拍やアクセントなど細かく分類した発音練習を準備したことに比べると、《レコードによる日本語の学習》は語の並びに脈略がなく、アクセントもバラバラである。実際に収録音声を聞いてみると、「い」ははじめの「い」がガ行音、二つ目の「い」が鼻濁音で発音されているし、「つくえ」「くき」で母音の無声化が見られる。何の説明もなくこうした音声を聞かされた学習者は混乱するであろう。この発音練習に比べると、S Jの発音練習が学習者いかに親切で、わかりやすいものであったかがわかる。

次に、コロムビア 33646、33647、文部省内日本語教育振興会監修《ハナシコトバ》を考察する。このレコードは、『ハナシコトバ』

の付属レコードである。『ハナシコトバ』は上・中・下の三巻からなる初級用日本語教科書で、「始めて日本語を学ぼうとする東亜の人々が話言葉としての日本語を学習するための……教科書」（長谷川 一九九一・六三）である。そのレコードは、「一九四二年六月には『ハナシコトバ』のレコードが文部省関係者などの試験を経て完成した」（関 一九七七・一八六）ので、S Jとはほぼ同年代のレコードであるといつてよい。S Jは、戦時中のアメリカが、言語学者を総動員して作り上げた日本語教科書であるが、『ハナシコトバ』もまた、戦時中の日本政府が威信をかけて作り上げた日本語教科書である。『ハナシコトバ』作成にあたっては、長沼直兄が意見を述べたと<sup>34</sup>言われている。

レコードの収録内容は、教科書の印刷内容をそのまま全て朗読した形式である。このうち、『ハナシコトバ』の下巻は挿絵がふんだんに使われた四十四ページの教科書である。下巻のレコードは（下二）〜（下四）の両面二枚で、全体の収録時間は約十一分半である。発音練習などは一切ない。以下はその収録内容の一部である。ここで考察に使用した音声も、日本語教育学会編集『戦前戦中の日本語教育教材レコード 復刻版』に収録されているものである。朗読しているのは、女性一名である。

【収録内容…6】<sup>(5)</sup>

トーキョーカラ ホーテンオ トーツテ ペキンエ イキマス。  
 ペキンマデノ キシヤチンワ クジューニエン ハッセンデス。  
 モシ フタリデ イケバ イクラ カカルデシヨーカー

〔中略〕

キシヤガ テツキョーオ トーツテイキマス。

ゴーゴート オトオ タテテ ハシツテイマス。

コドモガ カワノ キシデ 「バンザイ」 「バンザイ」 ト

イツテイマス。

〔中略〕

ゴブサタシマシタ。

ミナサン オカワリワ アリマセンカ。

チョーカコーニ<sup>(36)</sup> イル オジガ ワタクシノ ウチエ マイリ  
 マス。

オヒマデシタラ アサツテノ バン オイデクダサイ。

モーコノ メズラシイ ハナシオ キキマシヨ。

ユーガタニ ナリマシタ。

ニシノ ソラガ マツカデス。

コドモガ ユーヤケノ ウタオ ウタツテイマス。

「ユーヤケ コヤケデ ヒガ クレテ、ヤマノ オテラノ カ  
 ネガ ナル。

オテテ ツナイデ ミナ カエロー。カラスト イツシヨニ  
 カエリマシヨ。」

(コロムビア 3366) 文部省内日本語教育振興会監修 A (ハナシコ

トバ (下二)、B (ハナシコトバ (下二))。コロムビア 3367

A (ハナシコトバ (下三)、B (ハナシコトバ (下四))

このレコードは、文と文の間の間隔が一秒と二秒と非常に短い。  
 例えば「トーキョーカラ ホーテンオ トーツテ ペキンエ イキ  
 マス」という文が読まれた後、わずか二秒で次の文「ペキンマデノ  
 キシヤチンワ クジューニエン ハッセンデス」が始まり、またそ  
 の二秒後に「モシ フタリデ イケバ イクラ カカルデシヨ  
 カ」が読まれる。これでは、レコードを聞いた学習者が、後につい  
 て発音練習しようとしても、「トーキョーカラ」まで言ったところ  
 で、もう次の文が始まってしまふ。同様に、「チョーカコーニ イ  
 ル オジガ ワタクシノ ウチエ マイリマス」の後、わずか一秒  
 後に「オヒマデシタラ アサツテノ バン オイデクダサイ」が始  
 まる。夕焼け小焼けの歌の部分に関しては、もはやポーズは全くな  
 い。よほど上級学習者でなければ、後について発音することはでき  
 ないであろう。レコードゆえ少し戻してまた聞くという作業はもち  
 ろん簡単ではなかったはずである。

S Jが、ネイティブスピーカーの発音を真似するだけのポーズを



確保したレコードであることは既に何度も述べてきた。そのことは、一文がかなり長くなっても変わらない。その確認のため、Unit 10 の Section A の収録内容を見ておきたい（収録内容…7）。

次頁の収録部分では、“Watakushi wa mata anata no otosan ya okasan ni. ita koto ga arimasen.” の後に五秒間のポーズがある。同様に “Issyo ni uri e turete irite, syookai-site kudasan.” の後にも四秒半のポーズがある。したがって、学習者はネイティブスピーカーの発音を聞いた後、十分に繰り返し発音練習ができるのである。

ところで、『ハナシコトバ』には、『日本語教科用ハナシコトバ学習指導書』（以下、『ハナシコトバ学習指導書』と略記）がある。これは、長沼直兄が執筆したものである。<sup>(47)</sup> 『ハナシコトバ』は問答法を中心として教えられていた。例えば【収録内容…6】で取り上げた「トーキョーカラ ホーテンオ トーツテ ペキンエ イキマス。…モシ フタリデ イケバ イクラ カカルデシヨカ」の部分では、次のような教室活動が行われていたことが『ハナシコトバ学習指導書』からわかる。

○<sup>(48)</sup> とうきやうから ほうてんまで なにに のつていきますか。  
（地図を指しながら）

△きしやに のつていきます（一人々々に）

○ほうてんから ぺきんまで なにに のつていきますか。（地

図を指しながら）

△きしやに のつていきます（一人々々に）

○これは なんですか。（汽車の切符を掲げ示して）

△きつぷです。（指導者も和して一齊に、また一人一人に）

○きつぷ。（繰返す。）

△きつぷ。（一人々々に）

○これは どこから どこまでの きつぷですか。（切符を示し、または切符を圖示して）

△とうきやうから ぺきんまでの きつぷです。（一人々々に）

○きしやちん。（と繰返していひながら、切符を示し、また財布を示して、その意を明らかにする。）

きしやちんは いくらですか。（圖示したきつぷの金額の符號を指して）

○△クジューニエン ハッセン。（繰返す）

○拾圓紙幣として紙幣大の紙九枚を敷へさせてクジュー エンと板書し、壹圓紙幣として紙幣大の紙を二枚敷へさせて二を書加へ（または壹圓紙幣として紙幣大の紙を九十二枚敷へさせ）、なほ壹錢銅貨八枚を敷へさせてハッセンと書き足す。

クジューニエン ハッセン。（繰返す）

△クジューニエン ハッセン。（一人々々に）

○くじふにゑん はつせん。

【収録内容：7】

Unit 10 Section A Basic Sentences

男性 A	Still or yet
男性 B	máda
(くり返し)	máda
男性 A	father
男性 B	otóosañ
(くり返し)	otóosañ
男性 A	mother
男性 B	okáasañ
(くり返し)	okáasañ
男性 A	father and mother
男性 B	otóosañ ya okáasañ
(くり返し)	otóosañ ya okáasañ
男性 A	I haven't met your father and mother yet.
男性 B	Watakusi wa máda anáta no otóosañ ya okáasañ ni, átta koto ga arimasēñ.
	(5秒のポーズ)
(くり返し)	Watakusi wa máda anáta no otóosañ ya okáasañ ni, átta koto ga arimasēñ.
	(5秒のポーズ)
男性 A	together
男性 B	issyo ni
(くり返し)	issyo ni
男性 A	take along
男性 B	tureru
(くり返し)	tureru
男性 A	introduce
男性 B	syookai-suru
(くり返し)	syookai-suru
男性 A	Please take me home with you and introduce me.
男性 B	Issyo ni uti e turete itte, syookai-site kudasai.
	(4秒半のポーズ)
(くり返し)	Issyo ni uti e turete itte, syookai-site kudasai.
	(4秒半のポーズ)

注：【収録内容：7】は筆者が書き起こしたものである。線より左側の男性 A、男性 B、(くり返し)という言葉そのものは収録されていない。表記は SJ 本文に合わせて。ただし、SJ 本文では uti e と書かれているが、レコードでは uti e と発音されていることは、既に第三節で述べたとおりである。

出典：Bloch & Jorden 1972 (カセットテープ、日文研所蔵)。

たくさんですね。

それは なんの おかねですか。

△きしやちんです。(二人々に)

○さうです、きしやちんです。(といひながら、さきに板書した

符號キシヤの下にチンと書き加へる。)

キシヤチン。(繰返す。)

△キシヤチン。(二人々に)

○これは ひとりの きしやちんですか、ふたりの きしやち

んですか。

△(それは) ひとりの きしやちんです。(一人々に)

○もし ふたりで いけば いくら かかるでせうか。

(言語文化研究所 一九九八c:四九〇五三、表記は原文通り)

『ハナシコトバ学習指導書』では、レコードについて何も書かれていない。学習指導書の通りの教室活動が行われていたとすれば、少なくとも教室でレコードは必要なかったであろう。もちろん、この時代、学習者が自宅でレコードを聞いて学習したとは考えにくい。レコードの文と文の間のポーズが非常に短いこと、教室では問答法を中心とした授業が行われていたことなどから考えると、『ハナシコトバ』のレコードは、学習者がレコードを聞いて発音を繰り返し練習することを想定して作られたというわけではなさそうである。

ネイティブスピーカーの音を真似して発音練習させるというS Jの徹底した方針は、『ハナシコトバ』にはない。『ハナシコトバ』のレコードは、明確で具体的な使用目的がなく、漠然と、日本語普及のために作られたレコードであるような印象を受ける。

河路は次のように述べているが、『ハナシコトバ』のレコードは、結果的に学習者ではなく、日本語教師が標準的な発音を聞くために役立ったレコードなのである。

当時、普及すべき日本語は、「標準語」で、模範的な発音、アクセントを最初から提示することが大切であった。日本語教員養成研修においても「発音」の実習は、標準的な発音・アクセントの訓練であった。

しかし、このことからわかるように、実際に大陸に赴いた日本人日本語教師が必ずしも標準的な発音・アクセントの使い手であったわけではない。

五枚セットのレコードは、標準的な発音・アクセントの模範を示すために作成された(河路 二〇一三)。<sup>19)</sup>

ここまで、S Jより前に日本国内で作られた主要な日本語教育レコードを概観してきた。戦前戦中に作られた日本語教育レコードは、戦後の一九六〇年代の頃から本格的に始まった外国人を対象とした

日本語教育ではほとんど使われることはなかった。戦後に作られたレコードとしては、水谷によれば、次のようなものがある。

○“Naganuma's Practical Japanese” 長沼直兄 発行 開拓社 昭和三十四年六月 レコードはコロムビアLP三枚。価格 ¥二、四〇〇

○“Practical Spoken Japanese” 「実用日本語会話」三浦順二、一九六四年、三省堂、価格 ¥二、〇〇〇 フォノシート五枚（録音時間四時間四十分）

○“Japanese on Record” by O. Vaccari 価格 ¥四、〇〇〇 レコードはLP三枚

○“Living Japanese, A Complete Language”, by E. Shirota 価格 ¥四、三二〇 レコードLP四枚（水谷 一九七三：七二〜七三）

以上、S Jの周辺に位置付けられる、戦前・戦中の語学教育と音声教材について概観してきた。昭和初期に日本で発売された日本語教育レコードは、どれも学習者が日本語習得をするために工夫されたレコードであると言いたいものばかりであった。レコードを完成した目的は明確ではなく、どのようにレコードを使って学習すればよいかはつきりしないのである。S Jはネイティブスピーカーの

発音を聞き、繰り返し発音練習するために、文と文の間にポーズを十分に設けた。しかし『ハナシコトバ』のレコードは、日本語を「聞く」ことが目的であり、文を聞いた後すぐその発音を真似して練習するためには作られていなかった。このように考えてきたとき、S Jのレコードは、外国人を対象とした日本語教育の先駆的レコードであったということができるだろう。もちろんその内容は印刷されたテキストの音読ではあるのだが、外国語の音を聞いて、それを繰り返し発音して練習するという、現在では当たり前の語学学習スタイルの先駆的存在なのである。

## 六 おわりに

言語学者バーナード・ブロックの日本語教育上の業績の一つにS Jがあることは、日本語教育関係者にほとんど知られることなく今日に至っている。まして付属レコードの存在は、これまで全く目の見ることがなかった。そのレコードの存在を明らかにしたこと、またその過程で羽根幹三という日系人を掘り起こすことができたということが、本研究の大きな意義である。

本稿での考察を踏まえ、S Jのレコードは、外国人を対象とした日本語教育の先駆的存在として、日本語教育史の中に記述されるべきであると考えられる。また、ブロックの業績の一つとして、このレ

コードは正当に評価され、研究がなされる必要があるということをも  
本稿の結論としたい。

結局、レコードの吹き込みを行った人物は誰だったのだろうか。  
S J の著者として、ブロック、ジョーデン、羽根幹三、Toshio Kono  
の名前しか挙げられていないのだから、吹き込みを行ったのは英語  
がブロック、日本語が羽根幹三であると考えるのが妥当なように思  
われる。しかし、そう断定できる根拠は残念ながら見つからず、お  
らず、一番大きな謎を残したまま本稿を終える。

ミラー (一九六九: xv) によれば、「イエール大学でブロックが日  
本語を研究し、教えるのを手伝うインフォーマントを雇うに至った  
手紙が、任用書類と給与計算書、移民当局者に対する嘆願書などと  
一緒にある」ということである。それを見れば、レコードの収録を  
行った人物が特定できるだろうか。これを今後の課題として残す。

注

- (1) Darian (1972: 84-85) の “an appreciation of literature and culture” を筆者が訳  
した。
- (2) ロイ・A・ミラー著、林栄一監訳 (一九六九)、xiii 頁。
- (3) Armed Edition 版は国立国会図書館に収録されているが、付属レコードは  
収録されていない。
- (4) Listening 1a は、日本語を聞く練習問題である。ここでの表記は原文通り。  
大文字・小文字も原文に従った。

(5) 元盤の内容とテープの内容を比較して同じであることを示せばよいの  
だが、現在元盤を入手することができないため、傍証を示すことしかでき  
ない。そのため完全に同じものであることを保証することは難しい。今後、  
元盤を入手することができたら、完全に同じであるかどうか検証したい。

(6) T. E. A. M.: The Evangelical Alliance Mission (略称「チーム」)。一九四九年  
中華人民共和国の成立により中国伝道が継続不可能になったため、中国大  
陸を去り、日本で開拓伝道を始めた宣教師団 (この注釈も山下  
一九九五: 一一八からの引用)。

(7) 原文は以下の通り。

A native speaker is the only good source of first-hand knowledge of any language.  
Only a native speaker can tell you whether your pronunciation sounds normal, and  
whether the sentences you use in your Japanese conversations are actually Japanese.

The method used in this Manual requires the presence of a native speaker of  
Japanese at every session of the group. If no native speaker is available, you can use  
instead the phonograph records that are supplied with the Manual. Even if you have a  
native speaker at hand, you can still make good use of the phonograph records for  
extra drill and for review. The records can't answer questions, but they can give you  
the same word or sentence over and over again in exactly the same way (Bloch &  
Jordan 1945c: iv).

(8) この冊子にはページ数がなく、引用部は “Do the records give me a chance to  
talk?” の章から引用した。原文は以下の通り。

A unique feature: A Holt SPOKEN LANGUAGE recording gives you the  
opportunity to speak and repeat the words of the native while the record is playing.  
You don't have to stop the record to talk, or wait until the whole record has been  
played. You start talking at once, at the beginning of the very first record, and imitate  
the native teacher twice after each word of phrase (A Manual and Key 45 からの引用)。

(9) The native speaker is referred to in this Manual as GUIDE (Bloch & Jordan

1945c: iv). (拙訳：ネイティブスピーカーのことを、この教科書ではガイドと呼ぶ)。

- (10) The Manual has been so organized that you can use it either by yourself or in a group. If you work in a group and have no regular teacher, choose one member of the group to act as LEADER (Bloch & Jordan 1945c: iii-iv). (拙訳：この教科書を、独学用としても、グループ学習用としても使えるように作られている。もしあなたがグループで活動し、決まった先生がいなければ、グループのうち一人を選び、リーダーとしなさい)。

(11) 原文は以下の通り。

If you have a Guide, here is what you should do in studying the Basic Sentences:

1. The Leader reads the first English word or phrase.
2. The Guide speaks the Japanese
3. The whole group repeats what the Guide has said.
4. The Guide speaks the Japanese again.
5. The whole group repeats it again.

Proceed in this way through the whole list of Basic Sentences, with the Leader giving the English equivalent first, the Guide speaking the Japanese twice, and the group as a whole repeating it after him each time.

If you are using the phonograph records, they will give you steps 1, 2, and 4. There is a pause in the record after each Japanese word or sentence, so that the group can repeat it (Bloch & Jordan 1945c: 1).

(12) 原文は以下の通り。

The Guide or the speaker on the phonograph records will read them to you, with a pause after every sentence to give you time to repeat it after him. Speak up loud and clear, and imitate the Guide's pronunciation as closely as you can.

The first time through, keep your book closed and see how much you can understand through the ear alone. The second time through, open your book and

follow the printed version with your eye as you listen (Bloch & Jordan 1945c: 22).

(13) 原文は以下の通り。

The Leader will choose one member of the group to read the following section out loud, and the Guide or the speaker on the phonograph records will give you the Japanese words in the Practices. After each word that you hear from the Guide, repeat it after him in unison. Imitate his pronunciation as exactly as you can, with special attention to the sound that is being discussed. Go through each practice as often as you need to in order to get the pronunciation right. If you have a Guide, he will tell you whether your imitation of the Japanese satisfies him; if it doesn't, he will keep on saying the word over and over until you get it right. If you are using the phonograph records, the whole group should judge the quality of each man's pronunciation, and should keep on playing the Practice over and over until every man's imitation sounds like an echo. On the phonograph records, the speaker will pronounce each Japanese word only once, with a pause after it long enough to let you repeat it after him at the same rate of speed. The English equivalents are printed in this book but are not given on the phonograph records (Bloch & Jordan 1945c: 14).

(14) 録音・再生機器の精度については、以下に倉田から引用する。この引用部は倉田曰く、『理化学協会雑誌』第四十四巻(明治二十年十二月十五日発兌)の「エヂソン氏新發明蓄声器」を林静介(理化学協会書記)が訳したものである。

通常自然ノ声ニテ通常ノ速度ヲ以テ之ニ向ツテ談話シ、談ジ終レバシト即チホノグラムヲ特別ニ造ラレタル小箱ノ内ニ入レ、之ヲ先方ニ送ル事ナリ。扱テ、之ヲ受取リタル先方ノ人ハ、直チニ其ノ所持ノ同器ニ置ケバ、談話次第二發出シ、恰カモ発信人ト対語スルト異ナル事ナク、其ノ分明爽快ナル、現時存在スル電話器中ノ最良ナルモノヲ以テスルモ、之ニ優サル事能ハズ。且ツ最モ驚ク可キハ、音声ノ調子ガ両器ニ於テ毫モ変異セザル事ニシテ、発信処ニ於テ二十人ノ人々ガ互ニ立替ハリテ話シタル其ノ声ハ、

受信処ニ於テ正サシク同ジ調子ヲ以テ順次ニ顯ハレ出ヅル事是ナリ。

又タ一度話シ置キタルモノハ、幾年ニテモ之ヲ貯ヘ置キ、一モ變スル事ナキ、其ノ上ニ此ノ器ヲ作クルノ費用モ、通常ノ書状紙ヲ製スルノ費用ニ超過セズシテ、受信処ニ於テ発スル声ノ速度モ、始メ発信処ニ於テセシモノニ異ナラス(倉田 一九七九:二〇〇〜二二)。

これによれば、アメリカのレコード録音技術は、明治二十年の段階で既に、録音した場所での声の速度とレコードを再生した際に流れる声の速度が同じであったということである。もともと科学的に測定したのかどうかは不確かである。このことが仮に事実だったとしても、まだなおSJがレコードからカセットテープに移し替えられた際に、録音機器の兼ね合いでスピードが遅くなったなどという可能性も否定することはできない。

(15) ここでの測定は、VictorのMicro Component MD System UX-22で再生したストップウォッチで計測を行った。

(16) 原文は以下の通り。

Every normal question in Japanese ends in *ka*; and any statement can be turned into a question by adding *ka* at the end, without any other change (Bloch & Jordan 1945c: 9).

(17) ジョーデンのイントネーションに関する拙訳は、Jordan (1963: xxxviii-xli) を参照した。

(18) 原文は以下の通り。

Questions with *ka* end in rising intonation or in low intonation.  
All sentences ending with the question particle *ka* are questions; but not all questions end with *ka*. For example, the phrase *anata wa 'as for you'* becomes a question when pronounced with question intonation (Jordan 1963: 9-10).

(19) この訳は、ロイ・A・ミラー著、林栄一監訳(一九六九)『ブロック日本語論考』の二六〜二七頁の訳をそのまま引用した。

(20) 原文は次の通り。

An utterance in Japanese ends with one of four intonations.

(1) Falling, with the last syllable lower in pitch than the second-last. Meaning: conclusive ('end of sentence' or the like). Symbol: /, e.g. *Sōo desu ka*. 'Is that so?'

(2) Rising, with the last syllable considerably higher in pitch than the second-last. Meaning: animation or special interest. Symbol: /?, e.g. *Sōo desu ka?* 'Is that [really] so?' (expressing interest or surprise)

(3) High-falling, with a wide interval between the highest pitch (on the last accented syllable, or, if no syllable is accented, on the first syllable of the utterance) and the lowest (on the last syllable). Meaning: lively emotion. Symbol: /!, e.g. *Sōo desu ka!* 'Oh so that's it!'

(4) Level, with the last syllable slightly higher after an unaccented syllable, lower and slightly rising after an accented syllable. Meaning: suspensive ('incompleteness' or the like). Symbol: /., e.g. *Sōo desu ga..* 'That may be so, but [still]...' (Bloch 1946: 154-155)

(21) 原文は以下の通り。

Some speakers of Japanese pronounce this consonant like the 'dz' in 'adze' or the 'ds' in 'beds'. Follow your Guides and say the sound in the way that he says it: but if he pronounces z like 'dz', remember that the sounds 'dz' and 'z' are interchangeable in Japanese, and that either one is correct wherever the consonant z occurs before the vowels a, e, o, and u (Bloch & Jordan 1945c: 66).

(22) 原文は以下の通り。

One can learn to understand and to speak a language only by hearing and imitating speakers of that language. These speakers are called informants (Bloomfield 1942: 2).

(23) 原文は以下の通り。

The informant is not a teacher and must not be treated as such. As a rule, he will never have studied the sounds, inflections, or constructions of his language. He cannot

make correct theoretical statements about his language; any attempts he may make in this direction will turn out to be a sheer waste of time. Even a trained linguist can furnish generalizations about a language only after much careful work. One is often tempted to ask the informant such questions as 'How do you produce that sound?' or 'When do you use that verb form?' or the like. Such questions merely embarrass and confuse the informant; he has not the training which would enable him to answer, and he will only waste your time by trying to patch up some sort of an explanation (Bloomfield 1942: 2).

(24) 原文は以下の通り。

In sum, educated or 'cultured' informants are by no means preferable and often inferior. The best informant is one who can be made to talk freely and naturally over a wide range of vocabulary and at the same time can slow up his speech sufficiently for dictation. The worst informant is one who delivers theoretical discourses in English.

Treat the informant courteously as an equal, but hold him to the task of speaking in his own language and of dictating speeches for you to write down. Encourage him in narrative, reminiscence, and humor, provided he presents them in his own language (Bloomfield 1942: 4).

(25) Mikiso Hane の漢字表記は、国立国会図書館典拠データベース検索・提供サービス (Web NDL Authorities) に記載されているものである。

(26) ノックス大学のホームページ [http://department.knox.edu/news\\_events/2003/x6196.html](http://department.knox.edu/news_events/2003/x6196.html) より引用。原文は以下の通り。

Hane was born in 1922 in Hollister, California, to Japanese immigrant parents and lived there until the age of ten, when his parents sent him to Japan, where he lived with an uncle and attended school in Hiroshima.

Hane returned to the United States in 1940, and following the outbreak of war with Japan in 1941, he was interned by the United States government in a camp in Arizona from May 1942 until October 1943.

After 18 months in the internment camp, Hane applied for a position teaching Japanese at a program operated by the U. S. Army at Yale University. Following the war he earned college degrees at Yale — a bachelor's degree in 1952, a master's degree in 1953, and a doctoral degree in 1957 — paying his own way through college by teaching Japanese and setting type for an Asian studies journal.

... Hane taught a wide range of history courses at Knox — including Japanese, Chinese, Indian and Russian history, as well as the Western civilization sequence—from 1961 until his retirement in 1992 (Knox College Website).

(27) ここに挙げた業績は、いずれも Knox College Website に記載されている。

(28) 大正十一年（一九二二年）のごとである。

(29) 上田萬年「標準語に就きて」が一八九五年に発表されており、大正十一年（一九二二年）には、既に標準語という概念はあったと考えられるが、原文通り引用した。倉田と桜井は標準語という語について定義を示しておらず、どのような意味でこの語を用いたのかは不明である。

(30) このレコードの収録内容が、どこで発言されたものであるのか、講演であったのか、聴衆はどのような人物であったのかなど詳細は不明である。

(31) 【収録内容：4】は、筆者が書き起こしたものである。

(32) ここでいう東京とは、『NHK日本語発音アクセント辞典』に収録の金田一春彦「共通語の発音とアクセント」が使用する東京と同じ意味で用いた。なお補足だが、プロック自身、SJで取り扱う日本語を、the speech of educated persons in Tokyo\* (拙訳：東京の教養ある人々の話し言葉) (Bloch & Jordan 1945a: iii) と述べている。

(33) 【収録内容：5】は、筆者が書き起こしたものである。

(34) 河路（二〇一一：二）や山下（一九九八：八〜一〇）にそう記載されている。

(35) 【収録内容：6】は、筆者が書き起こしたものである。表記は『ハナシコトバ』（下）の本文に合わせた。



- (96) チョーカコー：張家口（中国の地名）。
- (97) 河路（二〇一一：二〇三）' 山下（一九九八：九）を参照。
- (98) ○は指導者、△は學語者である（原文表記の#44）。
- (99) [http://www.rufs.ac.jp/blog/sg/news/renji\\_booklet\\_23.pdf](http://www.rufs.ac.jp/blog/sg/news/renji_booklet_23.pdf) ' 二〇一五年五月現在閲覧可能。
- 参考文献
- Bloch, B. (1946) Studies in Colloquial Japanese: II. *Syntax. Language* 22, 154-155.
- Bloch, B. & E. H. Jordan with the collaboration of Mikiso Hane, Toshio Kono, and others (1945a) *Spoken Japanese Basic Course Units 1-12* (War Department Education Manual EM 561), published for the United States Armed Forces Institute by the Linguistic Society of America and the Intensive Language Program, American Council of Learned Societies.
- Bloch, B. & E. H. Jordan with the collaboration of Mikiso Hane, Toshio Kono, and others (1945b) *Spoken Japanese Basic Course Units 13-30* (War Department Education Manual EM 562), published for the United States Armed Forces Institute by the Linguistic Society of America and the Intensive Language Program, American Council of Learned Societies [(1945a) 二] (1945b) 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十].
- Bloch, B. & E. H. Jordan (1945c) *Spoken Japanese Book One*. H. Holt, pp. ii-B, ii-C, iv, 1, 9, 14, 22, 66.
- Bloch, B. & E. H. Jordan with the collaboration of Mikiso Hane, Toshio Kono and others (1945d) *Guides Manual for Spoken Japanese: Basic Course Units 1-30* (War Department Education Manual EM 563). The United States Armed Forces Institute.
- Bloch, B. & E. H. Jordan (1946) *Spoken Japanese Book Two*. H. Holt [(1945c) 二] (1946) 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十].
- Bloch, B. & E. H. Jordan (1972) *Spoken Japanese Book One*. Spoken Language Services, pp. 142, 262. Reprinted in Bloch, B. & E. H. Jordan (1945c) *Spoken Japanese Book One*. H. Holt.
- Bloomfield, L. (1942) *Outline Guide for the Practical Study of Languages*. Baltimore: Linguistic Society of America, pp. 2, 4.
- Darian, S. G. (1972) *English as a Foreign Language*. Oklahoma, OK: University of Oklahoma Press, pp. 84-85.
- Hane, M. (1986) *Modern Japan: A Historical Survey*. Westview Press.
- Hane, M. (1996) *Eastern Phoenix: Japan since 1945*. Westview Press.
- Jordan, E. H. (1963) *Beginning Japanese Part 1*. New Haven and London: Yale University Press, pp. xxxviii-xli, 9-10, 391-392, 404.
- Maryama, M., translated by Hane, M. (1974) *Studies in the Intellectual History of Tokugawa Japan*. University of Tokyo Press.
- Unknown (1945) *Spoken Japanese: A Manual and Key for Your Spoken Language Course*. H. Holt.
- 荒井正道（一九七三）「語学のレニュー・テープ スペイン語編」『言語生活』No. 261' 一九七三年六月号、筑摩書房、五七頁。
- 池田菜穂子（二〇一四）「Bernard Blochの *Spoken Japanese* に関する研究——その成立の時代背景」『金城学院大学論集』二〇一四年九月号。
- NHK放送文化研究所編（一九九八）『NHK日本語発音アクセント辞典 新版』日本放送出版協会、七七頁、付録九〇頁、付録一三八頁。
- 河路由佳（二〇一一）「展示資料概説」『戦前・戦中・占領期 激動の時代の日本語教育——長沼直兄の仕事を中心に』東京外国語大学附属図書館第十二回特別展示 二一〜三三頁 ([http://www.rufs.ac.jp/blog/sg/news/renji\\_booklet\\_23.pdf](http://www.rufs.ac.jp/blog/sg/news/renji_booklet_23.pdf) よりダウンロード)。
- 倉田喜弘（一九七九）『日本レコード文化史』東京書籍、二〇〜二二頁、二七三頁。
- 言語文化研究所（一九九八a）『ハナシコトバ』（上）（日本語教育資料叢書 復

刻シリーズ第二回) 言語文化研究所、二〇三頁。

言語文化研究所(一九九八b)『ハナシコトバ』(下)(日本語教育資料叢書復

刻シリーズ第二回) 言語文化研究所、六頁、一六頁、二九〇三三頁。

言語文化研究所(一九九八c)『日本語教科用ハナシコトバ学習指導書』(下)(日

本語教育資料叢書 復刻シリーズ第二回) 言語文化研究所、四九〇五三三頁。

コロムビア五十年史編集委員会編(一九六二)『コロムビア五十年史』日本コロ

ムビア。

桜井隆(一九九二)『日本語教育レコード略史』並びに日本語教育学会・国立国

語研究所所蔵日本語教育レコード目録』『東京大学留学生センター紀要』第

二号、東京大学、三九〇四〇頁。

佐野泰彦(一九七三)『語学のレコード・テープ ポルトガル語編』『言語生活』

No. 264、一九七三年九月号、筑摩書房、九八頁。

関正昭(一九九七)『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク、一八六

頁。

高梨健吉ほか(一九六三)『不死鳥英文法ライブラリ第三巻 H・E・パーマー

J・H・グラタン、P・ガレー』南雲堂、一〇頁、三三三頁。

日本語教育学会(二〇〇三)『戦前戦中の日本語教育教材レコード 復刻版』凡

人社。

野村二郎(一九七三)『語学のレコード・テープ フランス語編』『言語生活』

No. 258、一九七三年三月号、筑摩書房、八二頁。

ハーバード・パツシン著、加瀬英明訳(一九八二)『米陸軍日本語学校 日本と

の出会い』ティビエス・ブリタニカ。

長谷川恒雄(一九九二)『戦前日本国内の日本語教育』『講座日本語と日本語教

育15 日本語教育の歴史』明治書院、六三頁。

水谷修(一九七三)『語学のレコード・テープ 日本語編』『言語生活』No. 256、

一九七三年一月号、筑摩書房、七二〇七三三頁。

森清(一九九二)『戦前在日米国外務館の日本語教育』『講座日本語と日本語教

育15 日本語教育の歴史』明治書院、八三頁。

山下秀雄(一九九五)『現代日本語教育の源流をたずねて(i)——教科書・教

授法の関係、音声言語・談話構造への着目など』『日本語教育研究』第三十

巻、言語文化研究所、一一四〇一五頁、一一八頁。

山下秀雄(一九九八)『現代日本語教育の源流をたずねて(続編)(iii)——日

本語教育振興会と『ハナシコトバ』の時代的背景』『日本語教育研究』第

三十六巻、言語文化研究所、八〇一〇頁。

ロイ・A・ミラー著、林栄一監訳(一九六九)『ブロック日本語論考』研究社、

xi頁、xiii頁、xv頁、二六〇二七頁。

#### Web Site

Knox College Website : [http://department.knox.edu/news\\_events/2003/x6196.html](http://department.knox.edu/news_events/2003/x6196.html)

#### 音声資料

Bloch, B. & E. H. Jordan (1972) *Spoken Japanese Book One*. Spoken Language Services  
の付属カセットテープ(国際日本文化研究センター所蔵)。

E. H. Jordan (1963) *Beginning Japanese Part 1*. New Haven and London: Yale University  
Press. の付属カセットテープ。

日本語教育学会(二〇〇三)『戦前戦中の日本語教育教材レコード 復刻版』凡  
人社。

テープ1 (1) コロムビア33000 神保格《発音とアクセント》

A (日本語のアクセントと言葉調子(上))

(6) コロムビア33350 国際日本語協会編《レコードによる日本

語の学習 JAPANESE LANGUAGE STUDY COURSE》

A (日本語の発音(一) Pronunciation Exercise 1: The Japanese

Vowels)

B 〈日本語の発音 (一) Pronunciation Key Words ii: The Japanese Syllabary〉

テープ 2 (24) コロムビア 33646 文部省内日本語教育振興会監修

《ハナシコトバ》

A 〈ハナシコトバ (下二)〉

B 〈ハナシコトバ (下二)〉

テープ 3 (25) コロムビア 33647 文部省内日本語教育振興会監修

《ハナシコトバ》

A 〈ハナシコトバ (下三)〉

B 〈ハナシコトバ (下四)〉

名古屋大学日本語教育研究グループ編 (二〇〇二) *A Course In Modern Japanese*

[*Revised Edition*] *Volume One* 名古屋大学出版会の付属CD

付記

音声資料は、レコードタイトルを《》、A・B面のタイトルを〈〉で示した。ただし具体的なタイトルがない、または不明のものについては、単に付属カセットテープ・CDと記した。

謝辞

本研究に際して、特別共同利用研究員としての受け入れを快く許可していただき、終始ご指導ご鞭撻を頂きました国際日本文化研究センターのジョン・ブリン教授に感謝申し上げます。また、本稿をご精読頂き建設的なご意見、ご指摘を頂きました国際日本文化研究センター関係者の皆様に深謝致します。ありがとうございました。